

風光明媚な 甲佐町を 甚句で 詠う



●平成20年4月から今年3月まで町くらし安全推進室長を務めた古荘重之さんが、勤務地として甲佐町の地域と人々に触れ合う中で、小さいながらもさまざまな先人たちの史跡が残り、暮らしに密接した地域の神話や伝説、民話など伝わっていることを知るにつれて、甲佐町の魅力を形として残したいと作られた甚句です。



甲佐町を甚句で歌う

風光明媚な甲佐町

熊本城下の奥座敷

豊富な自然に育まれ

神話、伝説、数あれば

相撲甚句の一節で

語り尽くせぬ ことばかり

甲佐明神、龍命の第二子で

わずか七つで甲佐を統治

熊襲征伐、神功様が

鎧甲を献納して

甲佐神社に戦勝祈願

これが甲佐の、地名の起源

海陸神社の御由緒は

日本書紀や古事記にも

記述が残る海幸や

山幸彦の伝説で

龍神太鼓が打ち鳴らす

龍の昇天、これ如何に

名門名家も数多あり

居並ぶ中でも渡辺家

頼光様の四天王で

酒吞童子に鬼同丸

都の鬼ども退治した

渡辺綱の子々孫々

鎮西八郎為朝様は

槍を矢にする強弓自慢

雁回山のでっぺんで

甲佐をめぐって矢を放ち

落ちた処が白旗山で

明神祭って吉となす



肥後の御家人、我武者らで
とりわけ竹崎季長公
元寇の役で大奮闘
蒙古襲来絵詞を
甲佐神社に奉納し
晴れて海東郡の地頭職

肥後の名君清正公
天下無双の城を建て
治山治水の国づくり
傍若無人の大川を
見事に袈裟懸鶴の瀬堰
四百年も郷守る

落ち鮎踊る梁棚は
肥後の殿様細川様の
夏の涼みの川遊び
江戸の風情を残したままの
茅葺き屋根の東屋は
明日に伝える文化財

麻生原のキンモクセイ
色は薄くて小ぶりだが
気高き香りは芳醇で
四方三里に漂って
虫を集めて鳥を集めて
人も集めて ハアゝ 日本一

甲佐語るにや緑川
町の真ん中縦断し
切るに切れない縁有り
川のはぐくみ承けながら
川を見守り川と一緒に
川に寄り添い活きている

(古莊重之氏・作)